

カレッジ通信

智辯学園奈良カレッジ小学部

令和元年度 1月号

令和2年1月17日 発行



新年明けましておめでとうございます。

保護者の皆様には、つつがなく新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

今年、子年です。「子」という字は、頭部の大きな幼児の形からきた象形文字です。中国の『漢書』では、「子」は、繁殖する・うむという意味をもつ「孳」という字からきており、新しい生命が種子の中に萌（きざ）し始める状態を表しているとのことです。中国伝来の十二支は、もともと植物が循環する様子を表しているの、十二支の一番目にそのような意味をもつ「子」がくるのだそうです。そういう意味で、子年は新しい物事や運気のサイクルの始まる年になると考えられています。

今年、教育の世界でも新しいことが始まります。いよいよ小学校の新学習指導要領が、全面实施されます。

グローバル化やAIなどの技術革新が急速に進み、予測困難なこれからの時代に、子供たちには自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められます。学校での学びを通じ、子供たちがそのような「生きる力」を育むために、新しい学習指導要領が4月からすべての小学校で実施されるのです。

新学習指導要領は学ぶ内容、指導する内容を示すだけでなく、「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」という学び方も明らかにし、未来の担い手となるために必要な資質・能力の育成を目標にしています。

学習内容も、言語能力の確実な育成、理数教育や伝統文化に関する教育、体験活動の充実、また、高学年に外国語科を創設、中学年から外国語活動を学ぶようにするなど英語教育を深化させ、論理的思考力を身に付けることにもつながるプログラミング教育も本格化するとしています。

本校では、すでにこの新しい学習指導要領を先取りして、さらに内容を発展充実させた教育内容とカリキュラムを工夫して2018年度から先行実施しています。

また、教員の働き方改革に関わって、教員の適正な業務の在り方について考え、教育の質の向上と新しい教育の在り方を追究しています。

今年は今まで以上に、児童も教員も健やかで充実した学校生活を送れる一年にしたいと考えています。

今年も、児童たちの大いなる可能性を信じて、私たちにできることに真摯に取り組んでまいりますので、保護者の皆様には、なお一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



1月の教育講演会について

近年スマートフォンなど、インターネット接続の機器の急速な普及やインターネット利用の低年齢化に伴い、児童がインターネットの利用に起因する犯罪被害やトラブルに巻き込まれるといった事案が発生しています。昨年の11月に大阪の小学6年生女子児童がSNSを通じて誘い出され監禁されるという事件はご存じのことと思います。その後も奈良県の女子高校生がSNSを介して誘い出され、誘拐されるという事件も発生しました。

次代を担う子供たちがインターネットに潜む危険を理解し、適切に利用できるように指導するのは私たち大人の役割であると思います。そのような考えから、1月の保護者会ではスマートフォンやSNSに関わっての講演会を開催することにいたしました。

保護者の皆様にはぜひともご参加くださいますようお願い申し上げます。

コンクール受賞結果のお知らせ

児童たちが制作した作品が各コンクールで受賞しましたのでお知らせします。

大和川コンクール

絵・写真部門高学年の部

大和川水環境協議会賞

3年1組 新田莉央（にった りお）

近畿地方整備局長賞

4年2組 野々宮彩斗（ののみや あやと）

第65回青少年読書感想文奈良県コンクール

毎日新聞社賞

2年2組 那和純里（なわ すみり）

「色んなこころ」

佳作

1年1組 野村果歩（のむら かほ）

「こころってどこにあるのでしょうか」

3年1組 原田実子（はらだ みこ）

「うそにかくされた本当の気持ち」

4年1組 石田陽彩（いしだ ひいろ）

「『パンプキン』で身近に感じた戦争」

4年2組 北村晋太郎（きたむら しんたろう）

「ぼくの『神様』」

5年1組 香月蒼太（かづき そうた）

「かべのおこうに夢がある」

5年2組 木村心奏（きむら このか）

「本当に最後まで責任を持って飼えますか」

1～2月の学校行事予定

月	日	曜	行 事	月	日	曜	行 事
1 月	18	土	家庭学習日	2 月	1	土	
	19	日	中学部入試(6年実力テスト)		2	日	2次入試(家庭学習日)
	20	月			3	月	2/2の振替休日
	21	火			4	火	修学旅行説明会(第2回)
	22	水	参観・保護者会(1～5年)		5	水	
	23	木			6	木	
	24	金	いじめアンケート		7	金	地域別説明会(羽曳野)
	25	土			8	土	高等部卒業式(家庭学習日)
	26	日			9	日	
	27	月			10	月	2/8の振替休日
	28	火	中学部進学予定者手続き(第1回)		11	火	建国記念の日
	29	水			12	水	
	30	木			13	木	
	31	金			14	金	
			15	土	感謝祭・文化祭		
			16	日	ブース説明会(近鉄奈良店)		
			17	月			
			18	火	進学予定者手続き(第2回)		
			19	水			
			20	木			

※先月号でもお知らせした通り、年間行事予定では、1～3年の保護者会を1/21(火)としていましたが、1/22(水)の4・5年生の保護者会と同日に行います。

カレッジの1ヶ月



右のQRコードを読み取ると、小学部ウェブページの学校ブログにアクセスできます。是非ご覧ください。

消防署見学（3年生） 12月17日

3年生が香芝消防署へ社会見学に行きました。消防署内や消防車両を見学したり、消防隊員さんのお話を聞いたりしました。



児童の作品紹介

12月号でご紹介しました、第28回全国小学生作文コンクール「わたしたちのまちのおまわりさん」において優秀賞（低学年の部）を受賞した3年2組小倉亜彩日さんの作品と、旺文社「第63回全国学芸サイエンスコンクール」小学生の部、読書感想文部門において金賞を受賞した6年2組濱田果穂さんの作品をご紹介します。

「こまったときはおまわりさんに」

3年2組 小倉 亜彩日

いつものように姉と下校していた時のことです。駅の階だんを上がっていると、わたしの姉がいきなりおねをたたかれました。わたしたちはびっくりして、おかえに来ていた母にすぐ言いました。母は、わたしが習い事に行っている間に、けいさつしょにれんらくしました。すると、けいさつの人がすぐ話を聞かせてほしいということで、習い事が終わった後、かしばけいさつしょへ行きました。

けいさつかんの人が、わたしたちに今日あったことについて聞いてくれました。わたしは、きんちょうしてしまって、小さな声でしか話せませんでした。多分聞きにくかったわたしの声ですが、そのけいさつかんの方は、やさしく聞いてくれました。その顔を見ると、わたしもきんちょうが少しとれて、きちんと話せるようになりました。

けいさつの人達は、何日にもわたって調べてくれました。わたしたちも、登校前にけいさつしょに行ったり、駅へけいさつの人といっしょに行ったりしました。おまわりさんは、わたしたちの話や、周りのぼうはんカメラのえいぞうなどを使って、わたし達が安心して駅を使えるよう、対さくして動いてくれました。姉がたたかれた後しばらくは、駅を使うのがいやだったけれど、駅を使う時間に見回りをしたり、近鉄の電車でも見守ってくれたりしたおかげで、今は安心して姉もわたしも、そして1年生になった弟も電車を使っています。いきなりたたかれることも、それい来ありません。

もし、けいさつの人がいなかったら、今まで当たり前に使っていた駅は使うのがいやなままかもしれません。わたしの姉みたいな人がその後も出たらと思うとこわいし、本当に助かりました。けいさつのみなさん、これからもわたしたちのまちを見守ってくださいね。

「守りたかった物」

6年2組 濱田 果穂

本が好き。本が大好き。私の手元には、いつも本がありました。ジャンルは問いません。今も机のそばにはお気に入りの本たちが並んでいて、いつでも手にとることが出来ます。そんな私が出会った、一冊の本。

「お前は、ただの物知りになりたいのか」帯に書かれたこの言葉に、私はギクッとしました。「何のために本を読んでいるのだろう」という思いがモヤモヤとわき上がりました。

主人公は林太郎。高校生。両親は無く、古書店を営んでいるおじいちゃんと二人暮らしでした。そのおじいちゃんが亡くなった所から物語は始まります。ひとりぼっちの林太郎の前にどこからともなく現れた、ヒトの言葉を話すトラネコのトラ。トラに「本を守るために、力を貸してくれ」と頼まれ、奇妙な“本の世界”へと導かれることとなります。林太郎は“本の世界”で「閉じこめる者」（読んだ本の数の多さを誇示する）、「切りきざむ者」（本を読む速さを求める）、「売りさばく者」（本が売れることを重要視する）と出会い、最後に「初老の女性」（長い歴史の中で心の歪みを持ってしまった本自身？）と対峙する中で、亡くなったおじいちゃんの数々の言葉が思い起こされ、“本”の持つ真実の意味に気付かされていきます。その林太郎と同化するように、私も私にとっての“本とは”という意味を考えながら物語の中を歩いていきました。中でも「閉じこめる者」と出会った時、“まるで以前の自分のようだ”と感じ心が痛くなりました。学校に行くことが少し辛い時期があった私は、上手く表わせない、伝えられない、そんなもどかしさを「文章」にしてくれている本を求めていました。できるだけ強い言葉で、何かを思い知らせてくれるような本ばかりを選んでいました。本の中の強い言葉をまるで鎧のように自分に着せて心を守り、武器のように周囲に向けていました。林太郎が「閉じこめる者」と向き合った時に思い出したおじいちゃん言葉は、あの頃の私にも語りかけてくれました。“それは本の力であり、お前の力ではない”“自分の頭で考え自分の足で歩かなければ、空虚な借り物でしかない”そして“お前は、ただの物知りになりたいのか”と。どれほどたくさん本を読み、数々の武将や偉人の名言・格言を知ったとしてもそれは単なる知識にしかならないのです。大切なのは本の数や得た知識を誇るのではなく、たった一冊であっても何度も何度も読み返し、その本から何を感じとり、自分自身で噛みくだき、読み始める前の自分から一歩踏み出すための「糧」としていけるかなのです。

本の世界の奇妙な住人と出会うたび、林太郎はおじいちゃんが自分に伝えてくれた言葉を思い出して、その真の意味を理解します。本の結論を知ることが急ぐのではなく、時に往復して読み返し、時に苦しみながら進めることで大きな気づきを得られる読書があることを。本は消耗品ではなく、売れることが全てではないことを。そしてついに、最後に出会った“本の精霊”のような女性の前では、林太郎自身の考えでひとつの答えにたどりつきます。本に描かれているたくさんの人。その人たちの物語や言葉に触れ一緒になって感じることで自分以外の人の心を知ることができる。“人を思う心”を伝えてくれるカコソが本の力であると。以前の私のように本から得た言葉をまとうのではなく、寄りそい共感し「その人」を想う。そして「では、自分は？」と自らに問い、自分自身の答えを見出し自分の足で一歩踏み出すための糧としていくのが「本の力」なのだとも私に気づかされました。

この本が私に語りかけてくれていることはまだまだありそうです。読み返すたびに新たな一歩へつながる力を得て、この本と共にどこまで成長できるのか…三年後、五年後にまたこの本の感想文を書いてみたいです。